

---

# 子どもたちに負の遺産を伝える展示

— 「ダニエルの物語」と「アンネ×アマ」 —

兼清 順子

立命館大学国際平和ミュージアム学芸員

---

## 1. はじめに

日本の平和博物館の多くは戦争体験の継承を目的として設置されている。資料収集や調査、教育普及事業など様々な取り組みを行っているが、戦争体験を直接伝えることができる体験者が減少する中、今後は展示がより大きな役割を果たすこととなり、子ども達に戦争体験を伝える上でもその持つ比重は大きくなる。しかし、多くの平和博物館は一つの展示で子どもから高齢者までを対象としている。複雑な歴史や悲惨な体験を伝える上で“年齢に応じたアプローチ”が求められる一方、展示面積や制作体制の制約から複数の展示を持つことは難しい。そのため一つの展示を制作し、子ども向けに学校の平和学習や地域学習での利用を鑑みた解説シートの配布や生活に密着した題材に力を入れるといった付加方法で乗り切ることが多い<sup>1)</sup>。

しかし、博物館には「子どものための博物館」(キッズミュージアム)の考え方があり、子どもへのアプローチをベースに組み立てられた施設もある。1899年にニューヨークのブルックリンに作られ、その後アメリカを中心に広がった「子どものための博物館」は、体感的な理解力に訴える構成主義に基づいた展示やプログラムを展開する所だ。染川香澄<sup>2)</sup>によれば、五感を使うハンズ・オンや、日常生活をベースに身のまわりにあるものをとりあげて子どもの興味を引き出すスタイル、展示とそれに込められた思いが一つ一つで対応した流れ、視点を変えると

いくつものメッセージが読み取れる内容などが特徴である。近年、一般向け(大人向け)の常設展示のほか、こうしたコンセプトによる子ども向けの常設展示室を別途設ける博物館もある。例えば、沖縄県立博物館・美術館の「ふれあい体験室」は、ハンズ・オンのスタイルをとる「体験キット」によって、五感を使った遊びの中から沖縄の自然の仕組みや伝統的な技術や言葉などを学ぶことができ、常設展示の内容ともリンクしている(サンゴ礁、グスクの石積み、島コトバ、民具など)<sup>3)</sup>。

平和博物館の中にも、沖縄県平和祈念資料館の子どもプロセス展示や、地球市民神奈川プラザのこどもの国際理解展示室のように子どもが平和や国際理解について学びやすいアプローチを重視した施設もある。ただ、こうした取り組みも、平和や国際理解を学ぶ上で体感的な要素を取り入れるなど、アプローチ方法に工夫が施されているものであり、子どもが暴力の歴史に触れ、悲惨さを体感することを目指したものではない。子どもが負の遺産に触れる場として考えた時、博物館展示は試行錯誤の中にある。

本稿はこの課題において先行事例として知られるUnited States Holocaust Memorial Museum(アメリカ合衆国ホロコースト記念博物館)に設置された“Remember the Children: Daniel’s Story”(子供達のことを想う:ダニエルの物語<sup>4)</sup>)と、同じくホロコースト体験を扱いながら異なるアプローチをとる阿嬭家- 和平與女性人権館(アマの家)で実施された“ANNE×AMA- GIRLS UNDER FIRE IN WW2”

(アンネとアマ、第二次世界大戦の攻撃を受けた少女達) 展を紹介し、負の遺産を子どもたちに伝える展示のあり方について考察する。筆者はこれらの展示を2018年1月(アメリカ合衆国ホロコースト記念館)と2019年2月(アマの家)に見学した。

## 2. 「ダニエルの物語」(アメリカ合衆国ホロコースト記念博物館)

### (1) 展示の様子

アメリカ合衆国ホロコースト博物館(United States Holocaust Memorial Museum)<sup>5)</sup>は、首都ワシントンD.C.の中心部、スミソニアン博物館群が並ぶナショナル・モールの一角にある。ホロコースト<sup>6)</sup>犠牲者の追悼とホロコーストについての教育を目的として1993年に開設された。建物内には巨大な常設展示、子供向け展示、特別展示、アーカイブ、カフェとショップなどが併設され、2019年までに4500万人の来館者が訪れている。コレクションと展示内容はホロコーストで多大な犠牲を出したユダヤ人に関するものが圧倒的に多い。しかし、設立当初からロマやポーランド人などホロコーストにより迫害を受けた多様な人々の歴史を展示する方針をとっている<sup>7)</sup>。また、カンボジアのジェノサイドを常設展示の一部に含めたり、シリアに関する特別展を開催するなど、ホロコーストに限定することなく歴史を通してジェノサイドの危険性を訴える場であると、その姿勢を示そうとしている。

建物の4階から2階にかけての常設展示は、「ナチスの攻撃1933年-1939年」(ヒトラーの台頭から39年9月の第二次世界大戦開戦まで)、「最終的解決1940年-1945年」(ユダヤ人への絶滅政策の加速)、「最終章」(救援者や傍観者などホロコーストへの多様な反応と戦後の生存者の生活再建や正義を求める動き)の3部構成で、推奨見学時間は1時間から3時間。アメリカによる解放をモチーフとした目撃する展示とも評されており<sup>8)</sup>、展示は歴史的背景を詳細に解説し、資料や写真をふんだんに用い、被害者の置かれた状況や虐殺の場面など残酷

な様子も提示している。例えば、展示入口では、「ホロコースト」の文字と、焼かれた死体の山とその隣に立つ兵士達を捉えた解放直後の収容所の写真が壁面いっぱい拡大されている。幼い子どもたちがホロコーストの暴力の衝撃とそこに至った複雑な歴史を受け止めることは難しく、対象年齢は11歳以上と設定されている。

そのため、これよりも幼い子どもたちを対象とするのが、「Remember the Children: Daniel's Story」(子供達のことを想う:ダニエルの物語)(以下、ダニエルの物語)である。対象年齢は8歳以上で、見学推奨時間は45分程度とされている。当初、Capital Children's Museum(国立子供博物館)の展示として制作され、各地に巡回し、改良を経てホロコースト記念博物館で公開されることとなった。展示はおよそ、1933年-38年(平和な子ども時代)、1938年-41年(ニュルンベルク法下で権利を奪われた生活と差別の加速)、1941年~44年(ゲットーに隔離され困窮生活を送る)、1944年(強制収容所に移送される)に区分することができる。体感型、対話型の構成がとられ、来館者は各時代のダニエルの物語の舞台となった空間を歩き回りながら、架空の人物であるダニエルが経験したホロコーストの一端に触れる。ほとんどの展示品は触れることができる複製品であり、展示内に歴史や資料の説明はない。詳細な歴史調査に基づいて練り上げられた物語が空間として展開されているが、デフォルメされている部分もある。

展示室入り口は、舞台の幕のような作りで、メルヘンの中に入って行く印象を与える。最初に目に入るのは、実際よりかなり大きく作られた日記、壁に書かれた「この物語は、ダニエルという名の男の子がホロコーストを生き延びた物語です。ドイツ、ウッジのゲットー、そしてアウシュヴィッツ強制収容所での子ども達の経験を下敷きにしています」のメッセージ、そして日記の後ろに描かれた窓である。続いて大人になったダニエルの声が子ども時代の家や家族を紹介する映像が流れる。さらに、「これはダニエルという名の男の子の物語です。ダニエルが家族と暮らしていた家を訪ねてください。ナチスが

「ダニエルの物語」の展示の様子



入口に置かれた日記



ダニエルの家の中（台所）



1939年のドイツ  
(ショーウィンドーが破られた店)



1941年のゲットーの路上の荷物



ゲットーの中、ダニエル一家が住む部屋



収容所の中

権力を掌握した後の町の中を歩いてください。ダニエルはゲットーに送られました。生活がどのように厳しかったのか見てください。ダニエルがどのように強制収容所を生き延びたのか見てください。最後に皆さんの感じたことについて考えて、それを記しましょう」と見学にあたってのメッセージが登場する。

この導入部分を過ぎると、「こちらがダニエルの家」という標識が現れ、1927年に生まれたダニエルと両親、2歳下の妹が暮らした家の中に導かれる。

家は清潔で明るく、調度品も整っている。ダニエルの部屋には、ベッドや机、おもちゃやスポーツ用品が揃っている。壁にはドイツ帝国領を示す地図、棚には父が第一次世界大戦の戦功者として受けた勲章もある。ダニエルが父を誇りに思い勲章をつけて遊んでいたことが日記の1ページとして明かされる。ダニエルの日記は、展示を通して彼の置かれた状況や心情を伝える仕掛けとなっている。歴史的知識がある見学者は当時のドイツの情勢やダニエルの家族

の立場を読み取ることもできる。しかし物語の主眼は、この家でのダニエルとその家族の体験にありそうした説明はない。続いて、ナチスが権力を掌握したことでダニエルの生活に恐ろしい変化が起きる。窓の外には火の手が上がるシナゴグの写真がはめ込まれ、日記にはダニエルの家族が経営する商店も襲われたことが記される。1938年11月の「水晶の夜事件」である。ここでも、事件の解説はなされず、ダニエルの経験が示唆される。

ダニエルの家を出ると、「1938年のドイツ」へ向かう標識があり、ショーウィンドーが破られたダニエルの家族の店、ユダヤ人お断りと張り紙のついた商店、ユダヤ人専用と記されたベンチなどが現れる。日記には通学をはじめ諸権利を奪われ、ダビデの星をつけることを強制された怒りが記される。そしてダニエルの家族はゲットーへ送られることとなり、大量の荷物が路上に並ぶ。

「ゲットー 1941年」は、ダニエルの家族が過ごしたゲットーとその周辺である。一家が住む汚い部屋は壁が破れ、調度品もなく、食べ物もない。日記には、それでも家族に食料を得ようとダニエルの母がゲットーのパン屋で働き奮闘している様子、ダニエルも働くため日記をつける時間が減り、寒さをしのぐため薪を盗んだと記されている。ダニエルは、盗みは悪いことだがもう何も意味をなさないと吐露している。

ダニエルを取り巻く状況はさらに悪化し、1944年8月、一家は移送の対象となる。強制収容所へ向かう貨車の一部を見上げながら進むとトンネルに入り、来館者は、鉄条網に囲まれ監視塔のある収容所の中にいる。ここで映像が流れ、ダニエルがどのような場所にたどり着いたのか伝えられる。この場面では日記は他の荷物と共に金網の外に転がっている。最後のメッセージとして、「写真を見て、音声を聞いてください。ダニエルと家族に何が起こりましたか。ホロコーストとはなんでしょうか。今日見たことを忘れないでください」との呼びかけがなされる。

結びのコーナーでは、受話器を通して登場人物のその後の運命をきくことができる。ダニエルと父は

ホロコーストを生き延びたが、母と妹は命を落とした。最後に、感想を書くコーナーがあり、来館者は見学を振り返り、ダニエルの経験について、そしてホロコーストとは何かを省察する。

## (2) ダニエルの経験を想像し、物語を共有する

ダニエルの物語は、探索して触れることができる空間と資料、日記や父の勲章など感情に訴える仕掛け、食べ物や遊びなど身近な題材、両親と妹といった感情移入しやすい設定を用い、子どものための博物館の技法を活用している。そして子ども達にダニエルの家族の経験を想像させることに成功している。来館者は想像することでこの物語を共有し、歴史に近づくのである。負の遺産である出来事を次世代が継承するとは、自らが経験していない他者の経験を想像するということなしにはできない。この点でダニエルの物語は、負の遺産を継承する展示である。

しかし、その歴史が虚構であることや、複雑な歴史を一つの物語にまとめることの是非も問われる。物語展示の成功例としてダニエルの物語を評価するレスリー・ベッドフォードは、以下のように論じている<sup>9)</sup>。ベッドフォードによれば、展示は細部に至るまで、ホロコーストを体験した人々の経験や記録や写真に基づいて制作されているが、フィクションであるダニエルは最後まで顔や姿が特定されることはない。友人達との写真もどの子がダニエルかわからないように示され、見る者の解釈の多様性を保っている。ダニエルの物語は、来館者に虚構を示すことではなく、ダニエルを想像させることを目的とした展示なのである。

一方、複雑な歴史の断片を一つの物語にまとめようとすれば解釈の余地は排除される。この点に対してベッドフォードは、導入と結びに大人になったダニエルの語りを配し、デフォルメした日記や勲章、実物より歪んだ空間配置など、過去を想起する捉え方を用いた演示をすることで、展示は語られたダニエルの記憶として来館者に迫ると指摘する。さらに、そもそもこの展示は歴史の事実を伝える常設展示があり、いずれそこで学ぶことを目的としているため、「安全な最初の一步」を踏み出すことに特化した展

示の存在が肯定されるとベッドフォードは指摘している。

### 3. 「アンネとアマ」(阿嬭家——和平與女性人權館 AMA Museum)

#### (1) 展示の様子

「アマの家」(阿嬭家——和平與女性人權館 AMA Museum)<sup>10)</sup>は、台湾の首都台北の旧市街の迪化街にあり、日本軍の「慰安婦<sup>11)</sup>」の歴史を伝える小さな博物館だ。迪化街は、かつて薬や乾物などの問屋街だったが、現在は古い建築を活かしたカフェや雑貨店が並ぶおしゃれなエリアになっている。「アマの家」も、100年以上前の煉瓦造りの建物を改装した施設である。開設は2016年だが、その経緯は1992年に遡る。台湾の婦女救援基金会は日本軍の「慰安婦」にされた女性の調査と彼女たちの日本政府に対する賠償請求を支援し、歴史調査や証言収集活動を進めてきた。また、生存者たちのエンパワーメントのプロジェクト、そのほかにもドメスティックバイオレンスの問題、人身売買と性的搾取の問題についての啓発活動などにも取り組んでいる。そして、2016年に被害の歴史と生存者たちのアクティビズムを伝え、女性の権利についての教育拠点とする博物館として「アマの家」を開設した。「アマの家」は、入り口1階はカフェになっておりフェアトレードの食材などを扱い、グッズも販売している。常設展示室は、カフェの奥、扉と廊下を抜けて向かう。中に入ると日本軍による「慰安婦」の歴史と、その被害を受けた3人の女性達の体験が簡潔にパネルと少量の資料で示されている。台湾から海南島や南方へ送られた女性もおり、慰安所跡地の様子や、海南島の慰安所開設に関わる文書資料、陸軍の配布していたコンドーム「突撃一番」などが展示されている。さらに、この体験を生き抜いたアマ達が正義を求めた動きや、エンパワーメントの一環として彼女達がやりたかったことを体験するプロジェクトの様子も紹介されている。生存者たちがスチュワーデスの制服やウェディングドレスを着た姿

は、生存者と支援者がとともに未来を求めた姿を伝える。また、別の展示室には、生存者たちが描いた絵や、被害者達の名前が天井のライトから降り注ぎ、手のひらに受けてみるができる通路などもある。

アンネ・フランクは、言わずと知れたホロコースト犠牲者である。アンネは1929年にハノーヴァーの銀行家の家に生まれたが、一家は1934年に迫害を逃れてオランダに移住、そしてアンネ13歳の誕生日直後から隠れ家生活を送った。しかし1944年夏、密告により強制収容所に送られ、アンネと姉のマルゴは1945年3月頃ベルゲン・ベルゼン強制収容所で亡くなった。「アンネの日記」は、アンネが隠れ家の人間模様や自らの心情を綴った日記である。戦後、ホロコーストを生き延びた父が出版し、多くの人々の心を打ち、世界各地で翻訳され映画化や舞台化もされた。隠れ家は、1957年にアンネ・フランクハウスとなり、アンネの記憶を伝える施設として現在も続いている。

「アンネ×アマ」(アンネとアマ、第二次世界大戦の攻撃を受けた少女達は、2018年7月から19年3月にかけて開催されたアンネ・フランクハウスとアマの家のコラボ展示である<sup>12)</sup>。会期中、入り口カフェには、アンネとアマの歴史を伝えるデジタル展示が設置されカフェ奥の扉から展示室へ続く廊下は、戦前のアマとアンネの写真が飾られタイムトンネルに見立てられた。アマとアンネそれぞれの物語に触れるためはじめは常設展示で3人の「慰安婦」生存者の体験を知り、その後一旦外に出て、壁に据えられた本棚(隠し扉)を開けて階段をのぼる構成となっていた。アンネの隠れ家入り口を模した階段を上がると、当時の世界情勢とアンネの生涯が、窓枠をイメージしたパネルで紹介される。アンネは隠れ家生活の中で200件以上の日記の記述を残した。この展示ではそのうち67を選び、25枚の窓様のパネルで紹介している。窓枠の中にガラスの代わりに黒板がはめ込まれイラストや説明が記されている。また、隠れ家の人々やその生活を紹介したパネル、救援者の証言映像コーナーもある。展示はその後、狭い階段を登り屋根裏に続く。屋根裏は暗く、アンネの机を表現した壁とアマの部屋を表現し

た壁、そして、アウシュヴィッツと阿マが「慰安婦」として囚われてた洞窟を表す壁が作られている。また、この空間には、アンネの友人だった女性がアウシュヴィッツを再訪した映像や阿マが慰安所跡を訪ねた映像も流されている。

壁はステンレスで作られ、鏡のように来館者の顔を映す。そこには、

「鏡に映った自分の姿を見て、誰の声が真っ先に聞こえますか？加害者、被害者、傍観者、救援者、私は誰でしょうか？」

との問いかけがなされる。また、この空間には他にも、来館者自身の立場を問う質問が投げかけられる。

「誰が彼らを傷つけたのでしょうか？加害者はやっていることに気がついていたのでしょうか？彼らに選択の余地はあったのでしょうか？」

「彼らはなぜこうした被害を受ける側になったのでしょうか？彼らには他に選択肢はあったでしょう

か？彼らは何かを変えることはできるでしょうか？」

来館者は薄暗い屋根裏のような空間でこれらの問いかけに向き合うのである。

## (2) 歴史を通して来館者の行動を問いかける

「アンネ×阿マ」は、日本軍の「慰安婦」の被害を受けた女性達の歴史を伝える常設展示と、アンネの展示を並列したものだ。同時代の出来事ではあるが、二つの展示を一つの展覧会とすることには正直なところ無理もある。演示においても、パネルと写真による説明に実物資料や映像を加えた従来の歴史展示の手法を中心とした「阿マ」の展示と、窓をテーマにイラストを多用したりハンズオンの要素を取り入れた「アンネ」の展示の方向性は微妙に噛み合っていない。

しかし、屋根裏部屋での問いかけを受けて来館者が省察することによって、二つの負の歴史を結んだ

## 「アンネ×阿マ」の展示の様子



本棚（隠し扉）を開けて中へ入る



窓枠をイメージしたパネル



アンネの机を模した展示



アウシュヴィッツを表す展示

一つの展覧会となり、目的を果たすのであろう。これらの問いかけにより、なぜ、この二つの展示に対峙しなければならなかったのか合点が行く来館者もあるのではないだろうか。ここで来館者に求められていることは、二つの経験の相違点や相関関係を探ることではなく、加害者とは何か、被害者とは何か、傍観者とは何か、それらは誰に何をもたらすのか、暴力を孕む歴史の中でどのような立場にあることを加害と呼び、被害と呼ぶのか、そして、今、この展示に向き合う自らは、どのような立場にあるのかといったことを考えることである。

挨拶パネルも、「この展示は、私たちはどのようにアンネやアマの悲劇を繰り返さないようにするのか、被害者、加害者、傍観者には他の選択肢はあったのか、そして何よりも重要なこととして、偏見や差別により引き起こされている痛みを直面した時、あなたはどちらの立場に立つのだろうか。ということをお私たちに問いかける」と結んでいる。

#### 4. おわりに

アメリカ合衆国ホロコースト記念博物館はウェブサイトの中でホロコーストという負の遺産に子どもたちが触れる上で、発達段階に応じたアプローチの必要性を述べている。

「第六学年以上の生徒達は、個別の目撃証言に共感を示し、出来事の範囲や深刻さを含めたホロコーストの歴史の複雑性を理解する能力を発揮する。それよりも幼い生徒達にとっては、個別の証言に共感することはできるが、それらを歴史的な脈の中に位置付けることは難しい」のである。そのため、ダニエルの物語は第4学年以上の子どもたちに、ドイツのユダヤ系少年の経験を元にホロコーストの歴史を紹介するよう設計されており、詳細な歴史の説明をするものではないとしている<sup>13)</sup>。

一方、「アンネ×アマ」は明確な年齢設定を示してはいないが、上記の基準に照らせば、第六学年以上の生徒たちを対象としている。ホロコーストと「慰安婦」被害者の証言に共感するだけでなく、被

害者、加害者、傍観者など、関わった人々の立場について自ら検討し、出来事の与える影響やその深刻さを含めて複雑な歴史を理解する能力を発揮して向き合うことを求めている。日常の延長として受け入れることが難しい歴史の展示に際して子どもたちの理解力を考慮して各段階に応じた展示の目的を設けることは歴史教育と同じことである。子どもたちの傷つきやすさが増していると指摘される今日、アプローチの手法には発達段階をふまえた工夫が求められる。

しかし、2つの展示には共通点もある。「アンネ×アマ」では、屋根裏部屋で、「ダニエルの物語」では最後に、展示制作側が来館者に問いたいことが明確に示されている。「ダニエルの家族に何が起きたのか、ホロコーストとは何なのか」「被害者はなぜ被害者となり、加害者はなぜ加害者となったのか、そして、あなたは加害者、被害者、傍観者、協力者、どの立場に立っているのか」と。これらは、考えることはできるが、解答を出すことはできない問いである。発達段階に応じて残酷な描写や複雑なシステムの説明を調整することは不可欠だが、この暴力は一体何なのか、と、たとえ相手が子どもであっても問いかけることは負の遺産を展示する上で更に重要なことではないだろうか。

※本稿は科研費「平和博物館における戦争体験継承のための展示モデル構築」(16K12814)及び「戦争の「歴史化」を考える—「戦争の消費」と戦争認識の変化」(19H01331)の助成を受けたものです。

#### 【注】

- 1) 立命館大学国際平和ミュージアムも、戦争の歴史を総合的に伝える展示を展開し、それぞれ大人向けと子ども向けのガイドブックがある。
- 2) 柴川香澄『こどものための博物館』岩波ブックレット No.362、岩波書店、1994年
- 3) 沖縄県立博物館・美術館ホームページ <https://okimu.jp/museum/permanent/experience/> (2019年9月1日最終アクセス)
- 4) 訳はアメリカ合衆国ホロコースト記念博物館配布物 Today at the Museum 日本語版による。
- 5) United States Holocaust Memorial Museum <https://www.ushmm.org>

- 6) Visitors Guide では、「ホロコーストとは、1933年から1945年の間に起った、ナチスドイツやその協力者たちにより、ヨーロッパに居住していたユダヤ人を、国家により組織された処刑執行により絶滅させたことを指し示す。この事件においてユダヤ人は主要な犠牲者であった。－600万人が殺害されたのである。また、ロマ・新ティ、障がいを抱えた人々、そして、ポーランド人も、人種的、民族的、そして国家主義的な理由で絶滅された。同性愛者、エホバの証人、特定の政治的信条を持つがゆえに拘束された政治犯らを含む、何百万もの人々もまた、ナチスの専制政治の下で悲しむべき抑圧を受け、殺害されたのであった。」(藤巻光浩『アメリカに渡った「ホロコースト」－ワシントンDCのホロコースト博物館から考える－』創成社、2015年：98)
- 7) Jeshajahu Weinberg and Rina Elieli, 1995, *The Holocaust Museum in Washington*, New York: RIZZOLI.
- 8) 藤巻光浩、2015年
- 9) Leslie Bedford “Finding the Story in History” in *Connecting Kids to History with Museum Exhibitions*, Lynn McRainey&John Russick Eds, 2010
- 10) AMA MUSEUM <https://www.twrf.org.tw/amamuseum/>
- 11) 「慰安婦」については、例えば「慰安所と呼ばれた施設などで、日本軍将兵との性行為を強制された女性たち」(アクティブ・ミュージアム 女たちの戦争と平和資料館 <https://wam-peace.org/ifaq/ifaq-01>) や、「無権利状態で自由を奪われ、兵士たちに性的に奉仕させられ、性奴隷ともいうべきもの」(『立命館大学国際平和ミュージアム 常設展図録』2005年、岩波書店、12頁)と説明されている。
- 12) ANNE X AMA- GIRLS UNDER FIRE IN WW2 Exhibition Brochure Ama Museum for Peace and Women’s Human Rights ed. 2018 Taipei
- 13) Fundamentals of Teaching The Holocaust: Age Appropriateness <https://www.ushmm.org/teach/fundamentals/age-appropriateness>